

肉体改造エクスタシー —中編サンプル—

ペニスが落ち着くのを待って、次に向かったのは大きな椅子だった。

「これ……」

テレビドラマで見たことがある。妊婦さんが苦痛に叫びながら座っていた椅子だ。

「こちらは腹筋台です」

「え？」

腹筋台……には見えなかった。どう見ても分娩台だ。台にはしっかりと左右に開いた足置きがついていたし、その前にはキャスター付きの丸椅子、横には背の低い棚がある。

「ここでは腹筋を鍛えることができます。いかがですか、腹筋」

「えと……」

南は腹筋だと主張するけれど、どう見ても、やはり腹筋台とは思えなかった。

「百聞は一見にしかずですよ」

「……はい」

きつと、恥ずかしいことをさせられるのだろう。でもそんなの、もうした後だ。

(オナニー見られるより恥ずかしいことなんてないよね……?)

自分で快感を追う姿ほど恥ずかしいことなんてそうないだろう。もしこの台の上で足を開いたまま腹筋運動をすることになったとしても、オナニーに比べれば。

「では座りましょう。どうぞ」

まるでお姫様にするように南が手を差し出してきた。礼を言っ左手をのせると、分娩台までエスコートしてくれる。

「怖くありませんよ」

「はい……」

少しづつ脈が速くなってきた。だって、足を開くのだ。きつと足元にある丸椅子には南が座り、近くからじつと陰部を覗くのだろう。いや、覗くとは言わない。だってそこが見えるように足を開くのだから、わざわざ覗く必要がない。ふっと視線をやるだけで、本来なら人に見せないようなところを見られるようにするのだ。

(早まったかも……)

オナニーと比べてどちらの方が恥ずかしいか、とは言えない気がしてきた。どちらも同じくらい恥ずかしい。

「ゆっくりでかまいませんよ」

南は始終丁寧だった。普通の椅子よりも高いからか、腰まで支えて座るのを待っていてくれる。

「ありがとうございます……」

鼓動が激しすぎて痛い。でもこれは恐怖ではなく興奮のせいだ。

「お尻や背中痛くありませんか」

「はい、大丈夫です」

「では足を」

自分でのせるのかな、と思ったけれど、南が持ち上げるようにしてのせてくれた——まるで南に足を開かれているようで興奮してしまう。

「股関節に痛みはないですか」

その質問は、きつと体が硬いことを知っているからだろう。大丈夫と告げて、体から力を抜く。

「では椅子の高さを上げますね」

そう言って、南は分婣台の前に置かれていた丸椅子に腰を下ろした。そしてゆっくりと分婣台の高さが上がり始める。

(あ………)

高さが上がることに恐怖心はない。しかし、そのせいで恥ずかしい部分と南の顔が同じ高さになってしまった。

(丸見えどころじゃないっ………!)

ペニスと陰囊、それからアナルももう見られた。でも、会陰は多分まだ見られたことはなかったはずだ。なのに今、そこも無防備にさらけ出してしまっている。

「あ………あ………」

「恥ずかしいですね……でも大丈夫ですよ。とてもきれいです」

そんなところ、何をもってきれいだと判断するのかは分からない。でも南の声は穏やかで、無理矢理言葉を絞り出しているようには聞こえなかった。

「ではまずアナルをほぐします。それからボールを入れて、腹筋を使って排泄してもらいます」

「えっ………」

単に足を開き、陰部を露出したままよくある腹筋を行うというのではなかったのか。てっきり、そんなものだろうと思っていた。

「入れるボールはアナルの柔らかさに応じてサイズを変えますので大丈夫ですよ」

「あ………」

そういう問題では——だって、こんなに大きく足を広げたままお尻から異物を出すなんて。

「では始めます。指でほぐしますので、少しだけいきんでください。覚えていますか？」

「はい………」

それは準備の際にもしたことだ。でも、全然状況が違う。

「ではどうぞ」

カタンという軽い音がした。おそらくローションのキャップでも置いたのだろう。恥ずかしい——でも嫌ではない。嫌と思うことができない。

「んっ」

「はい、上手です。アナルがちゃんと膨らみましたよ」

~~~~~

「あ、はぁんっ！」

「朔くん、ふーと細く息を吐きながら力を入れるんですよ」

「ふー……んっ！」

アナルには、直径五センチほどのボールを入れられていた。ボールといっても重いものではなくて、ピンポン玉を大きくしたようなもの。テニスボールのようなものでなくてよかったと思っただけで、いざいきんでみると、重みのないそれはなかなか出口に向かってくれない。

「はぁん——っ！」

「朔くん、」

つい、息を止めていきんでしまう。

隣に立つ南を見上げて謝る。

「うー……ごめんなさい」

「では私に合わせてくださいね」

南は左手をぎゅっと握ってくれた。そしてもう片方の手でお腹を優しくさすってくれる。

「頑張りましょうね」

まるで出産しているみたいだ。でも、そう考えると南は旦那さま——。

「わぁ……」

「ん？ どうしましたか？ お尻が痛みますか？」

「あっ、い、いえっ！」

南が旦那さまだったなら、なんてつい考えてしまった。視線を逸らしてもう一度呼吸を整える。

「ふー……ふー！」

息を吐きながらいきむというのにはまだ慣れない。でも南がお腹を撫でてくれるので、その感触で腹筋を意識し続けることができた。

「はぁ……ふー！」

かなり腹筋に効くトレーニングだな、と思った。さっきのオナホールを使ったトレーニングでは筋力よりも快感ばかり気になったけれど、今のところ性感は得られていない。指を入れられたりいやらしいことを言われたりしたときは感じたけれど、ボールがまだ内部の一ヶ所に留まり続けているせいか、便秘のときのような不快感を覚えるだけだった。

「少し休憩をしましょうか」

「……あの、」

「はい、何でしょう」

休憩中は手を離されてしまっただろう——そう思ったのに、南は手を握ったまま、お腹も撫でたまま顔覗き込んでくれた。

「もし出せなかったらどうなるんですか」

プロなのだから、そんなことにはならないようにボールサイズを考えてくれているはずだ。そ

れに、企業としても問題が起きないように何か対策は考えてくれては？……と思いつつ、あまりにも出せないで不安だった。

(もしかしたらもつと筋力があるって思われてたのかも……)

いや、もつと筋力があると思われていたのではなく、思った以上に筋力がなかった、という方が正しいだろう。もしこの件で南を不安にさせていたら申し訳ない。

「出せなかったら……そのときは出せるまでずっとこうして一緒にいましょう」

「っ……?!」

手を出してくれるとか、実は空気が抜ける仕様になっているとか、そういった具体的な方法を言われるものと思っていた。なのに、しかも、そんな――。

「こうして、何日でも手をぎゅっとして、お腹をさすって……たまには姿勢を変えて、しゃがむ形でいきんでみるのもいいですね。そのときは転んでしまわないよう、私の首に腕を回しておいでください」

「あ……あ……」

しゃがんでいきむ——しかも南に縋り付きながら……？

(いやいや、無理っ！)

そんなことできない。それに、そんなに時間をかけたら便だつてできてしまうだろう。そうしたら運よくボールを出せたとしても……それだけでは済まされなくなってしまう。

「ボールが出せるまでずっとそうしてくっついていきましょう。一人になんてしませんからご安心ください」

「南さん……」

お腹を撫でる手が温かい。でも、ちゃんと出さないと。

「南さん、もう一度します」

「はい。頑張りますよ」

「うん、頑張つて！」

「え？」

突然聞こえた声援。声のした方を見ると、オレンジ色のジャージを着た男性が陰部を覗き込んでいた。

「っあ、やっ……!!」

見られている。何も隠すものがないそこを。

(いつからっ?!)

全く気付かなかった。ずっと近くにいたのだろうか。

「ゆっくりいきんでごらん。ちゃんと産めるよ。大丈夫」

「西場さま」

(西場、さん……?)

三十代半ばだろうか。優しそうな顔。体はかなりがっちりしていて——なんだか消防士さんみたい。

「こんにちは、南くん」

南が担当してる会員さんなのだろうか。それとも南は全員のお客さんと知り合いなのか。

「この子は体験の子？」

「はい」

「そう。恥ずかしそうにしながらもすっごく頑張ってるなあって見てたんだ。オナホールも、気持ちいいのたくさん我慢して偉かったね」

「あ……」

なんと答えたらいいか分からなかった。だっぴすつと見られていたなんて。幸い——と言っていいのか、朔自身、この空間の感覚に慣れていたようで嫌悪感はない。けれど南以外に褒められると戸惑ってしまう。

「——朔くん、さあ、いきんでみましょう。ボールが出せたら少し休憩をしましょうね」

「あ、は——」

「朔くんっていうんだ。朔くん、頑張ってる」

「はい……ありがとうございます」

悪い人ではなさそうだが、けれど今は南と二人にしてほしい——なんて言えるわけもなく。南を見ても、表情は変わらない。遠慮してほしいとも、このままいてほしいとも思っていないような——こういうのは良くあることなのかもしれない。特に無料会員を希望するMコースの会員はSコースの会員に好かれた方が経営的にもメリットがあるのだろう。

左には南、足の間にある丸椅子には西場がいる。恥ずかしい。これでは本当に分娩シーンだ。

「ふ……ん、はあ……ん——っ」

「そう、いいですよ……お腹にしっかりと力が入っています」

南がお腹を軽く押した。

「お尻はばくばくしてるよ」

西場の熱いほどの視線をアナルに感じる。

~~~~~

第一休憩室はトレーニングルームの入り口横にあった。しかし想像していた——自販機とベンチが置いてあるだけの——場所とは全く違い、なぜか全裸の男の子が左右にそれぞれ十人ほど並んでいる。

そこは縦長の造りで、ドアから入って正面、部屋の真ん中には細長いベンチが二列に並んでいた。そしてベンチを挟むように、部屋の右手側には椅子に座った男の子たちが自らの意思で足を大きく開き、ペニスを垂らしている。

対して左手側には先ほど朔が使ったような分娩台が十台。こちらは足置きに足をのせることで開き、陰部をさらしている。

（うわ……すごい……）

広い部屋に並ぶ向かい合った陰部。これはもう、男の子が並んでいるというより陰部の展示だ。
「飲み物は彼らが出してくれませう」

説明しながら南は右手側、椅子に座って足を開く男の子たちの方に向かった。

「出す……？」

しかし、彼らの近くに冷蔵庫はない。一メートル間隔で裸の男の子が並んでいるだけだ。いや、裸ではない。よく見ると全員、ペニスに透明のケースをつけている。

(これって貞操帯……？)

「あの、もしかして……」

「はい。おそらくご想像のとおりかと思えます。ちなみに中身は水、スポーツドリンク、炭酸水、生です」

「……生？」

まさかお酒だろうか。今の「中身」という言い方からして彼らの体内に飲み物があることは間違いないようだけれど、それが体のどこだろうとアルコールはまずいのではないだろうかと心配になる。

「はい。生です。生……そのまま、という意味です。ビールではありません」

「っ……?!」

(そういうこと?!)

まさか……いやでも、ここにいる男の子たちのことを思えばお酒でなくて良かった……のだから。

「何になさいますか」

「あ、や、いえ……」

人の体内——しかも膀胱から出たものなんて例え水であっても飲むことなんてできない。でもそれを本人たちの前で口にすることもできず黙っていると、南が目細めて言った。

「朔くんは飲んでもらう方が好きそうですね。缶の飲み物がございます。何がよろしいですか」

「あ、いえ、大丈夫です、すみません」

自分のわがままで手間をかけたくはなかった。確かに喉の渇きは感じていたけれど、これは運動したからというより興奮したからだ。

「いえ、通常のももご用意しておりますから大丈夫ですよ」

「では……お茶をいただきます」

南から視線を外し、並んでいる男の子たちを盗み見る。みんな頬を上気させていて、飲もうとしない朔に不快感を覚えている様子はないけれど——そのときドアが開き、二人の男性が休憩室に入ってきた。慣れた手つきで壁に備え付けられた機械から紙コップを取り出し、それぞれ椅子に座った男の子の前に座る。

「せっかくだから、見学していきましょうか」

どうやら普通の飲み物は部屋の隅にある冷蔵庫から取っていいものらしい。冷蔵庫のドアには「フリードリンク・ご自由にどうぞ」と書かれた紙が貼られている。南はまるで映画でも見に来

たかのように朔に着席を促すと、冷蔵庫に向かった。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

差し出された缶を受け取り、並んでベンチに腰掛ける。

「ここでは好きなときに好きなだけ飲み物をお飲みいただけます。ちなみに一番人気は生なんですよ」

「生……」

いやらしい。尿をそんな風に呼ぶなんて。

「ああ、お二人とも生をご希望のようですね」

先ほど来た二人は男の子のペニスの先端を指でくすぐっていた。

「あっんっ、あっ」

男の子二人の嬌声が休憩室に響く。

「あんっ」

「出せるかな？」

男性は落ち着いた優しい声で訊いた。

「ゆっくりでいいよ」

そう言いながら、くすぐる指先を止めはしない。その様子があまりにもいやらしくて、見ているだけでペニスが力を持ち始めてしまった。

「っ……」

それを隠すように背中を丸めてしまったからか、南がこちらを見た。

「ああ、されるところを想像してしまいましたか」

「や、いえ……」

そこまで想像が膨らむ前です、とは言えなかった。でも、もしあんな風に南にペニスを弄られたら——。

「あっ、あっ、出るうっ！」

羞恥をごまかすように下を向いていると、男の子の高い声が上がった。思わずそちらに視線を向けると、男性がペニスから指を離し、ペニスの先に紙コップを添えるところだった。

（わ、本当に……）

まるでジュースサーバーのような扱い。男性の表情は見えないけれど、きつと嬉しそうにしているのだろう。

「ああっ！」

ジョボボ……と強い音が聞こえた。出ている。男の子が尿道口をくすぐられ、男性の持つ紙コップに排尿させられている——そう頭の中で考えたら、ペニスが痛みを訴えた。イきたい。腹筋運動と休憩で一度は落ち着いたはずのペニスが解放を求めている。

~~~~~

トレーニングルームに戻ると、先ほどより人が少なくなっているように感じられた。パラパラと人はいるけれど、順番待ちは発生しないようなほどよい混み具合。

「あの、みなさんお帰りになられたんですか」

「ああ……そうでした、そろそろ昼食の時間ですね。空腹時のトレーニングはよくありませんから、食事にいたしましょう」

「あ、いえ、僕は帰宅してから食べるので……南さんだけでも」

食事と聞いて最初に浮かんだのはお金だった。念のためと思って少しは持ってきたけれど、こんな高級なジムで出される食事ではドリンク代にしかならないだろう。

「体験には食事も含まれておりますから。お口に合うかは分かりませんが、無料ですし、一食分浮いてラッキーという気持ちで参りましょう」

もしかして、お金がないことを知っているのだろうか。それとも単に、入店の際に私服を見て貧乏だと悟ったのか。

(一応なるべく新しい服を選んだつもりだったけど……)

それでも買ったのは一年前……いや、二年前に買ったまま一着も新調していない。親もいない今、頼れるのは自分だけ。そう思うと極力節約して貯金に回しておきたかったのだ。アルバイト先には制服があったので、衣類の優先順位はとて低く、誰かと遊びに行くこともなくなったので外見なんて気にすらしていなかった。

(そういえば、南さんが来ているジャージも高そうだし……)

年二百四十万円もの会費費をいただくお店としては、安物は使えないのだろう。でもそれが似合っている時点で南自身にも高級感がある。

(世界が違う……)

そう思ったら、急に自分がちっぽけに見えた。食べるだけで精一杯の自分とは全く違う裕福な人たち。当然そこに至るまでにはたくさんの努力があったのだろうけれど、それにしただってあまりにも違いすぎた。

(……どうして僕はここにいるんだろう……)

惨めだった。ここは、自分がいていい場所じゃない。

「すみません、僕帰ります」

「え……？」

「あの、僕……えっと、」

急な感情の変化で、言い訳すらすぐには思い浮かばなかった。でも別に朔は客の立場なのだし、ここにさえ来なければもう二度と会うこともないのだから、取り繕わなくてもかまわないだろう。「ごめんなさい、ありがとうございます」

「何か、気に障るようなことを——」

「いえ！ そんなことないです。あの、何ていうか……僕やっぱりお金払えないですから……」

親がいない、お金がない、たったそれだけのことでどうしてこう惨めな思いをしなければなら  
ないのだろうか。でも、それが現実なのだから仕方がない。いや、親がいないというのはただの言  
い訳だ。確かに急だったけれど、もっと能力のある人はちゃんと稼いで自活している。

「だから、ごめんさい！」

思い切り頭を下げると、困ったような、言いくそような声で南が言った。

「実は、知っていました」

「え？」

「……ここではあれですから、一度部屋に戻りましょうか」

今「知っていた」と言ったように聞こえた。ということはやはり、服装から察していたとい  
うことだろう。

(恥ずかしい……)

足を開くのも、自分で快感を得ようとするのを見られるのも恥ずかしかった。でも今が、今日  
で一番恥ずかしい。きつとここに入ってきたときも、たくさん並んでいたトレーナーたちは心  
中で笑っていたことだろう。もしかしたらすでに控室では笑い話になっているかもしれない。「場  
違いなのが来たな」「南はハズレを引いたな」なんて。

「こちらへ」

「あ……」

動こうとしなかったからか、南に手首を握られた。そしてその手はスライドして、手を――。

(子供だって思ったのかな……)

お世話になっておきながら突然帰るなんて、本当にただの子供のわがままだ。それなのに、南  
に触れてもらえるのが嬉しくて手を振りほどけずにいる。

連れられたのは、身体測定や腸内洗浄をした部屋だった。ベッドに座るように促されて素直に  
従うと、南もすぐ横に座った。

「不安に思わせてしまってますみません」

「え、いえ、南さんは何も……」

南が悪いわけじゃない。これは単に朔のわがまま——いや、くだらないプライドのせいだ。

「実は、チラシを入れたのは私なんです」

~~~~~

アナルは、戸惑うほどスムーズに南の指を受け入れた。

「上手です。この辺り……どうですか？」

「あっ！」

南の指先がどこかに触れた瞬間、ピリツとしたような刺激を感じた。さっきまでの刺激とは全
く違う何か。

「やっぱり朔くんは優秀ですね。男の子はここで気持ち良くなれるんですよ」

「あっ、あっ」

刺激の強いところを、南は執拗に指先で揉んだ。くりくりと捏ねられ、太ももがびくんびくんと反応する。

「あっ、あっ、ああっ！」

「朔くん、朔くんの気持ちいいところはここですよ。覚えられましたか」

「あっ、あっ！」

まるで授業のように言われても、快感に支配されて全く頭に入っていない。

「朔くん」

「あっ！」

指が止まった。真っ白になっていた頭が、徐々に思考力を取り戻す。

「あ……はあ……南さん……」

「朔くん、気持ち良くなる場所がどこか覚えられましたか」

「え……場所……？」

そんなの分からない。今南が触ってくれたところが気持ちいいところだ、ということしか。

「そうです。今私の指はここにありますが、朔くんの気持ちいいところはどこですか？ 右？

左？ もっと奥ですか？」

「え、え」

(そんなことを言われても……！)

全然分からない。だって、もうどこだったのか覚えていない。

「ごめんなさい、分かりません」

素直に謝ると南が笑った。

「朔くんは本当にいいこですね。では、今度はゆっくりそこに行きますから、一緒に覚えてみましょう」

「あっ！」

南の指がずりりと抜けると、途端に大きな喪失感に襲われた。ただの指だと分かっているけれど、それでも交わりを解かれてしまったような気分。

「さあ、中に入れてください」

「あっ」

指がまた入ってきた。けれど、すぐにはさっきのところに行ってくれない。

「やあ……」

「さっきのところ、もっとしてほしいですか」

「はい……！！」

もうイきたかった。次は中の気持ちいいところを捏ねながら、ペニスも握って刺激してほしい。

「じゃあ、覚えましょう。今はまだ、入ったばかりのところですね」

「はい……」

そんなことはいいから早く、と思ってしまう。でも南が覚えるように言ったのだから、覚え

なくては。

「こうしてゆっくり中に入っていきますよ」

「あ、あっ」

「朔くん、ゆっくり息を吐いてください。快感に支配されると覚えられなくなってしまいますよ」
「あ……ごめんなさい」

今日何度も教わった呼吸法——実際には深呼吸を繰り返すだけなのだけれど、快感を拾うと途端にとても難しいことのように思えてしまう。一度気持ちを落ち着けるために瞼を閉じて、南の「ふー」という声に合わせて息を吐く。

「そう、上手です。ではそのまま、今度はお尻の中に意識を向けてみましょう。私の指があるのが分かりますね？」

「はい……南さんの指、僕の中に……」

「ええ。朔くんのお尻の中はとても温かくて、きゅっと締まっていてとても気持ちいいですよ」
「や……」

恥ずかしい。そんなところ、自分では見たことも触れたこともないのに、南に知られてしまっている。

「朔くんはお尻の中もとてもいいこです。では、そのまま意識しててくださいね。さあ、奥に入りますよ」

「あ、あっ……ふー……ふー……」

「ここ……」

褒められる悦びに浸りながら、頭にお尻の中をイメージする。とろとろに光ったピンク色の筒の中に南の指が二本、ゆっくりと奥へ進んでいくところ。

「さあ、もう少しですよ。このまままっすぐ行けば、朔くんがたくさん気持ち良くなれるところですよ」

「んっ、はいっ、覚えましたっ」

だからもう焦らさずにぐりぐりしてほしい。さっきより強く、射精するまで弄ってほしい。

「はい、ではトレーニンングルームに参りましょうか」

「……え？ や、」

さっきのいじわるの続きだろうと思った。だって、こんなタイミングで移動だなんて。なのに指はスツと抜かれてしまっ。唾えるものを失ったアナルはひくひくとその存在を求めて動いている。

「ここから先は朔くんがトレーニンングを通じて自分で気持ち良くなるんです。さあ、起きましようね」

手首を引かれ、上体を起こされてもまだ信じられなかった。だってすごく気持ち良かったのだ。あとはこのままペニスも弄ってもらってそしてそのまま——という気分になんて。なのに場所を覚えるように言われ、最後にはそこに触れてすらもらえず終わりだなんて。

「さあ朔くん、行きましよう」

~~~~~

「おちんちんがいいですっ！」

「分かりました。もう限界なんですね」

よかった、分かってくれた。そう思ったのに、案内されたのはデイルドのついた台だった。

「え……？」

「今ペニスを使ったら射精してしまうでしょう。そうしたら体験は終わってしまいます。苦しくてつらいでしょうが……でも我慢した分、あとでたくさん気持ち良くなれますから」

「あ……や……」

もうこれ以上我慢するなんて無理だ。おかしくなってしまう。確かに、もつと南と一緒にいたい。みんなに見られながらというのは恥ずかしいけれど気持ちいいし、何より今後もう経験することはないだろうから——でも、とにかくもうペニスが限界なのだ。

「やだ、や……」

助けてほしい。ペニスが壊れる前に許してほしい。でも一緒にいたい……でも壊れてしまいう。う。

「おねが……」

しかし南は「お尻の中を擦りたくありませんか」と提案するように言った。

「お尻のむずむずが治るかもしれませんよ」

「あ……」

ここまで言って許されないのなら、きつとこれ以上言っても無駄だ。それに確かにお尻のむずむずもひどいし、そちらだけでも落ち着けば、ペニスも楽になるかもしれない。

「……分か、りました……」

南の視線が朔の足元に移った。デイルドだけでなく、台も様々な高さがあるようなので、朔に合う高さを確認したのだろう。しかし、このデイルドつきの台をどうやって使うのかは想像もつかない。

（空気椅子……とか？）

お尻にデイルドを入れながら体勢を保つのは厳しそうだ。でもアナルを拡張られる快感を知ってしまった今、してみたいとも思ってしまう。

「では準備いたしますのでお待ちください——ああ、あちらでトレーニングされていますね。先に見学しましょうか」

南の視線を追ってみると、そこにいたのはオナホールコーナーでトレーナーに向かってペニスを扱っていた男の子だった。ぼろぼと大粒の涙を流しながらスクワットをしている。

（スクワット……！）

空気椅子ではなかった。でも、スクワットとどちらの方が楽だろうかと考えると……全く分かんなかった。

南に呼ばれ、少しだけそちらに近付く。やはり男の子はあのときの子だった。まだいるということは、あれからずっと射精はさせてもらえていないということだろう。

(かわいいそう……)

射精させてもらえていないのは朔も同じだけれど、朔は体験ということで説明にも時間を取られている。この子のようにずっとプレイしっぱなしというわけではないので、朔の方がいくらかマシ——そう思いながらも、やはりつらいのは変わらない。でも朔でさえこれほどつらいのだから、この子はどんなにつらいだろうかと考えるとかわいそうになった。しかし、動けば動くほどつらくなるだろうに、男の子は必死に体を動かし続けていた。

「あああっ！」

「さあ、あと三回ですよ」

「やあんっ！ あ、もうっ、もう無理ですっ！」

太ももが震えているのが朔にも分かった。完全に限界。しかし朔より近くにいて、その震えにも当然気付いているはずのトレーナーは楽しそうに目を細めていた。

「あと二回……つらいと言いながら、ペニスは萎えていませんよ」

「やあんっ！」

悲鳴の中に含まれる甘え。でも苦しいのは確かだろう。

男の子は必死に腰を上げるけれど、力が入らないのかなかなか上がりきらない。

「さあ頑張つて……もし失敗したら結腸まで犯されてしまいますよ」

「やだあっ！」

(すごい……)

もう立っているだけでもつらいだろうに、男の子は必死にトレーニングを続けようとしていた。本当に無理ならばそのまま前に倒れてしまえばいい。なのに、歯を食いしばってトレーニングを続けている。

「やあ！ あああ！」

最後に力を振り絞るように男の子がぐっと腰に力を入れたとき、朔たちの視線に気付いたのか、トレーナーの男性がこちらを向いた。

「——あ、南さん。体験の方ですね。どうぞこちらにいらしてください」

南を見ると、エスコートするように腰に手を添えられた。そのまま近付き、一メートルの距離からの見学。

「やあっ！ 見ないでえ……あ、あ、だめ、だめえ、あああああ！」

朔たちの存在で集中が切れたのか、男の子は後ろに転んでしまった。太いディルドがずずずつと入り、台にぺたりとお尻をつけてしまう。

「ああああああ！」

ビクンと男の子の体が跳ねた。その衝撃で状況を理解したのか、男の子は呆然とした表情で涎を垂らし、勃起からはどろっとした粘り気のある白濁をこぼした。

「ああ、イってしまいましたね」

トレーナーがしょうがないな、とでも言わんばかりの息を吐いた。でもその顔はとても優しくて。

「大丈夫ですか」

トレーナーが声を掛けても、男の子は反応を示さない。大丈夫だろうか——しかし、トレーナーは焦ることなく優しい手つきで頭を撫でた。

「頑張りましたね。でも、今日も目標未達成です。また一カ月、オナニーは我慢しましょうね」

~~~~~

「コーヒーをお出しします」

「ああ、ありがとう」

まさか、と思った。そしてそのままかはそのとおりで、テーブルの上で四つん這いになったウエーターのペニスを客の男性が握った途端、その先端から黒い液体が飛び出した。男性はその下で持ったカップにコーヒーを受け止めている。

「あっ……」

「よく出てるよ。熱くないかな」

「は、いっ」

ジョボジョボという音は朔のところまで聞こえてきた。

「あ、あっ」

「気持ち良さそうだね。ミルクもちゃんと出せるかな」

「はいっ！ もう、ミルクっ！ 出したいですっ！」

「ああ、うん、いいよ。コーヒーはもういっばいだ。先に一口飲ませてくれるかな」

「はいっ」

ウエーターの声が上がっている。よく見ると、さっきは柔らかかそうだったペニスが硬くなっている。

「うん、温度もちょうどいいよ。私は猫舌だからね。このコーヒーが一番適温だ」

「ありがとうございます……」

ウエーターのお尻が揺れている。その理由はもう朔にも分かった。イきたいのだ。ペニスを擦って、気持ち良くなりたい。

「おまたせ。ではミルクをいただきますよ」

「はいっ！」

嬉しそうにウエーターが頷くと、男性はカップをペニスの下に置いて、刺激を求めるそれを握った。

「あんっ！」

「美味しいミルクを出しておくれ」

「ん、は、はいっ！ あっ、あっ！」

(わ…………!)

もしかしてミルクとは——精液なのだろうか。でも、そんなの絶対に美味しくない。それにミルクと砂糖と言っていた。どう考えてもコーヒーと精液、砂糖の組み合わせは不味すぎるだろう。

「あの、せ、精液入りのコーヒーを飲むんですか……」

南が「通常のコーヒー」を頼んだ気持ちに分かるなと思いつつ尋ねると、南は「いえ」と首を振った。

「彼の絶頂と共に出てくるのは精液ではなくコーヒー用のミルクです」

「え？」

「給仕前に尿道から特別なチューブを精管に挿入し、精子やその他精液のもととなる体液を可能な限り抜き取ります。そしてその代わりにミルクを入れるんです」

「わ…………」

すごい技術だ。痛そう、と思うより先にそんなことが可能なのだろうかと思ってしまう。

「ああ、ほら、ミルクが出るようですよ」

「あああんっ！ あっ、あっ！ ミルクがっ！」

後編に続きます。

全編におけるタグ

腸内洗浄、視姦、オナニー、オナホール、強制絶頂、焦らし、羞恥、潮吹き、言葉責め・おむつ・サーバー飲尿・ディルドスクワット・精液吸引・性給仕・亀頭責め・失禁・視姦・焦らし・射精管理

肉体改造エクスタシー —中編サンプル—

goneone (ジャーわんわん)

2020/12/12

メール:goneonegoneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter:@goneone11

LINE:goneone

